文学部 日本文学科

佐藤優准教授／民俗学、伝承文学

多角的な視点とさまざまな史資料から庶民の文芸観を紡ぎ出す

文学部　日本文学科
准教授
佐藤（さとう）　優（まさる）

高校の国語教師を長年務め、2019年より盛岡大学准教授。源義経とその関連人物の伝説、寺社縁起と伝説の関連性、口頭伝承と文字文化の関連性などを研究課題としている。

庶民の文芸観や歴史観を伝承という視点から紐解く民俗学

古典文学研究は、複数ある写本を比較検討し、できるだけ原典に近い本文を作成する基礎的作業を経たあとで、そのテキストから厳密な解釈を紡ぎ出していきます。また、歴史研究は、史料批判を経た古文書を主な研究対象とし、そこから精確な歴史像を構築していきます。これらの研究は、「文字（テキスト）」の分析を中心とした学問だといえるでしょう。

ところで、私が専門としている民俗学は、『遠野物語』で知られる柳田國男が確立した学問です。近代教育制度が普及するまで、文字を自由に読み書きできる人々は限られていました。また、身の回りの生活を文字で書き残すことも一般的ではありませんでした。だから、柳田は庶民の文芸観や歴史観を構築するためには、文献以外の分析対象を見つける必要があると考えたのです。そこで、彼が着目したのが、年中行事や習俗、昔話や伝説といった民間に伝承されてきた民俗でした。

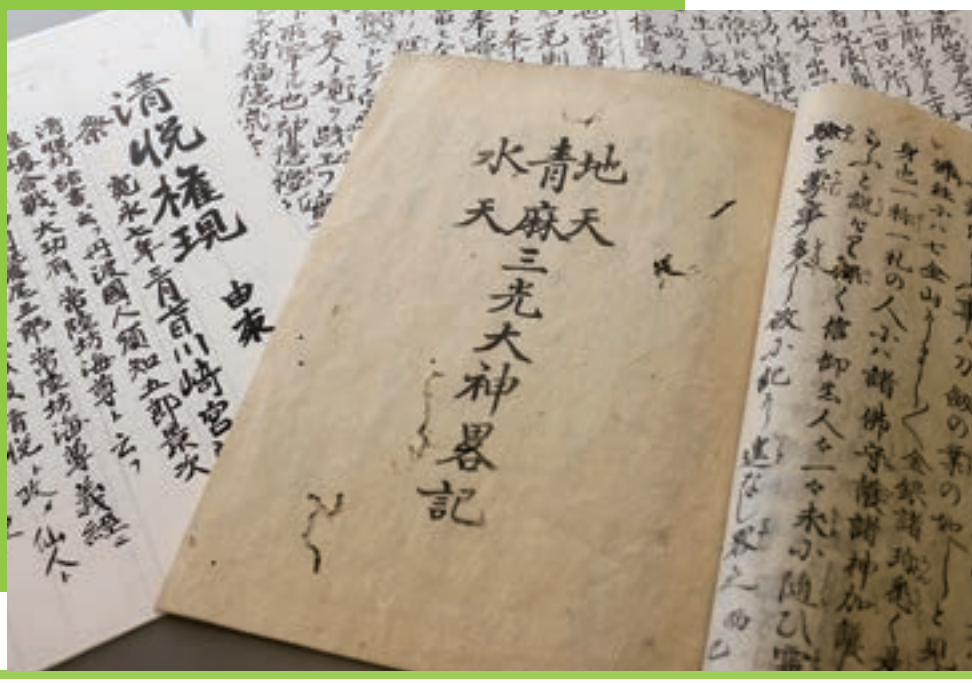
こうした経緯から1980年代くらいまでの民俗学、とりわけ私がこれまで特に勉強してきた口承文芸研究は、聞き取り調査から得られたデータ（録音された昔話など）を主たる分析材料とし、文字で書かれた史資料はその関連資料と位置づけられていました。

口頭伝承と文字文化の両方を研究対象に

しかし、1990年代ごろから、各地に残されている寺社縁起、民俗芸能や諸職の由来などが書いてある文献も口承文芸や民俗研究の分野で積極的に活用されるようになります。たしかに、こうした史資料は、方言がそのまま文字化されるなど読みにくい文体を持ち、内容も稚拙とされることから、これまでの文学研究や歴史学だけでなく民俗研究においても等閑に付されてきたきらいがあります。しかし、これらの史資料は、内容はもちろん、保管されている場所や形態・書写の方法などを分析すると、私たちのくらしの中における文芸観や歴史観を解き明かすヒントを教えてくれます。私自身も、できるだけ口頭伝承と文字文化双方の視点から対象を分析してきました。

3年前から岩手県で暮らすようになりましたが、ここは民俗研究のフィールドとして最適な場所だと感じています。というのも、現在でも民俗芸能が各地で演じられており、由来を伝える巻物も数多く伝存されています。県内各地にできるだけ足を運び、地域の方にもご協力いただきながら、これからも庶民の文芸意識や歴史認識をできるだけ明らかにしていきたいと考えています。

Faculty & Research



仙台の青麻神社境内にある「常陸坊海尊霊験之地」石碑
（1996年11月吉日建立）2010年3月29日佐藤撮影

Episode　時を超え、場所を超えて現れる常陸坊海尊

私の研究のテーマの一つが常陸坊海尊です。『義経記』に登場する人物で、衣川合戦の際に逃亡し、その後仙人として長く生き義経の物語を語り伝えたとされています。紫波町にある青麻神社の縁起に登場したり、宮城県岩切にある青麻神社に祀られていたり、菅江真澄の日記に一関市門崎を訪れたとも記されています。伝説がさまざまな形で各地に伝えられ文字として残っていることに、民俗学的興味をかき立てられます。